

P-161

当院の薬学実務実習と学生アンケート

松山赤十字病院 薬剤部

佐田 賢二、濱田 知子、仙波 昌三

平成22年度より、薬学6年生に伴う長期実務実習が始まった。当院においても、3期計14名の学生を受け入れた。今回、当院で行った実習で取り入れた点について発表する。取り入れたのは、以下の点である。1、糖尿病教育入院患者を担当する（薬、疾患の背景に患者の生活があることを学ぶため、入院から退院まで責任を持って接するため）。2、リウマチ科外来診察の見学（医師の診察を知り、リウマチ患者の訴えや動作を知るため）。3、救急処置室見学（救急の実態、問題を感じるため・希望者）。4、赤十字講習参加（赤十字事業について理解するため・希望者）。5、時間外業務見学（病院業務を深く知るため・希望者）。6、看護学校薬理学講義見学（看護学生への薬学教育のレベルの高さを感じ、モチベーションを上げるため・1期）。7、担当病棟の入れ替え（なるべく多くの疾患、患者に触れるため）。実習の評価を行うため、2期、3期の実習生に対し、実習終了直前に実習内容に関するアンケートを行った。計数調剤、注射薬混合、薬剤管理指導など9項目に対し、実習する機会が十分であったかを4段階評価（4・十分あった 3・ある程度あった 2・あまりなかった 1・ほとんどなかった）させたところ、2期の実習生は9項目の平均が2.4であった。この結果を踏まえ、3期の実習において時間配分を見直したところ、平均3.5と改善した。講義の内容、薬剤師による指導、助手による指導の3点について満足度を4段階評価させたところ、3項目平均で2期は3.2、3期は3.6であった。また、実習全般の満足度を聞いたところ、2期81%、3期84%と、高率であった。今後も学生のニーズを聞いて改善を重ね、次世代の薬剤師を養成できる実習にしていきたい。

P-163

当センター乳癌検診部門における過去5年間の成績と今後の課題

日本赤十字社和歌山医療センター 乳腺外科部¹⁾、
日本赤十字社和歌山医療センター 外科部²⁾

山田佳奈子¹⁾、芳林 浩史¹⁾、矢本 真子¹⁾、西村 友美¹⁾、
山田 晴美²⁾、加藤 博明¹⁾

【目的】1994年以降、乳癌は日本人女性の癌罹患率で1位となり、年間4万人以上の女性が罹患している。欧米では1990年代以降死亡率が低下しているにも関わらず、本邦では上昇傾向にある。今後、早期発見による生存率の上昇と治療に伴う経済的・社会的損失の軽減のため、乳癌検診の受診率と精度の上昇が急務となっている。今回、当センター乳癌検診部門における過去5年間の成績について調査したので報告する。

【対象と方法】平成17年12月から平成23年3月までに当センターで乳癌検診を受けた16,759人を対象とした。方法は要精検率、乳癌発見率などを調査し、これらを新たに検診ならびに精検機関の精度管理を行った平成21年4月前後と比較した。

【結果】乳癌検診を受けた16,759人のうち、要精検率15.2% (2,552/16,759人)、そのうち精検受診率は79.1% (2,019/2,552人)、乳癌発見率0.17% (28/16,759人)であった。新たに精度管理を行った平成21年4月前後と比較すると、前半期では要精検率15.4% (1,569/10,183人)、乳癌発見率0.12% (12/10,183人)であるのに対し、後半期では要精検率14.9% (983/6,576人)、乳癌発見率0.24% (16/6,576人)であった。

【結語】新たに導入した精度管理により乳癌発見率が上昇した。しかしながら、精検受診率が低く、追跡が十分にされていない症例もあるため、今後追跡方法を検討し、精度管理をより充実させる必要があると思われる。

P-162

病院におけるお薬手帳の利用状況の調査

釧路赤十字病院 薬剤部

田中 康裕、千田 泰健

【目的】薬の情報提供手段である「お薬手帳」(以下手帳)の利用状況を把握し、病院での適切な運用がなされているかを調査することを目的とする。

【方法】対象：釧路市内9病院の入院患者

調査(1)期間：平成23年1月4日から1月31日までの19日間

方法：入院初回面談時に担当薬剤師が調査票に記載

内容：性別、持参した情報、手帳に記載された有効な情報、確認した情報からのブレイクアウト、手帳を持参しなかった方への質問

調査(2)期間：平成23年1月から3月までの3か月間

方法：9病院の担当薬剤師が毎月ごと集計

内容：退院患者数、退院時指導算定件数

【結果】(1)調査期間に確認した患者は829件であった。持参した情報は手帳406件、薬情197件の順で手帳持参率は44%であり、持参情報なしが249件の27%であった。手帳に記載された有効な情報は52件あり、副作用24件、アレルギー18件の順であった。確認した情報からのブレイクアウトは40件あり、実薬と情報の不一致25件、用法用量の正5件の順であった。質問の手帳を持っていますかでは、手帳を持参しなかった患者426件中356件が持っている、知っているが持参せず。なぜ持参しませんでしたかでは、356件中必要性を感じない161件、忘れてだけ121件という理由が多かった。

(2)3か月間の退院患者数8506件に対し、退院時指導算定件数1209件であった。

【考察】病院薬局では、入院時は手帳の確認だけであり、退院時情報提供時のみ患者に手帳を配布、指導している。しかし病棟業務専任の薬剤師は少なく、患者の退院時指導に関わることが少ないのが現状である。また病院薬局間でお薬手帳に対する業務・意識の相違も示唆される。今後は入院決定時に手帳の持参を促し、入院中から手帳を持っていない患者に、必要性を啓発するといった内容を、地域全体として取り組む必要があると考える。

P-164

高頻度便秘を発現した外来化学療法プロトコルの調査および検討

旭川赤十字病院 薬剤部¹⁾、看護部²⁾、血液・腫瘍内科³⁾、
副院長⁴⁾

近藤 智幸¹⁾、西村 栄一¹⁾、井上 陽介¹⁾、鈴木 正樹¹⁾、
橋本 光生¹⁾、白府 敏弘¹⁾、後藤 吉延¹⁾、谷本知華子²⁾、
幸田 久平³⁾、牧野 憲一⁴⁾

【目的】抗がん治療では、タキサン系や5-HT₃拮抗剤などは便秘を誘発することが報告されているが、添付文書上の発現割合は少なく、タキサン系においては下痢の発現割合の方が多く記載されている。今回、外来化学療法室において多数の患者に便秘の訴えのあったプロトコルをretrospectiveに調査し検討を行った。

【方法】対象は平成22年4月から平成23年3月までに外来化学療法室で施行した3プロトコル(GEM療法、Tri-weekly Doc療法、DP療法)とし、対象患者の背景、便秘発現状況などの調査を行った。

【結果・考察】対象患者35名中、28名(80%)に便秘の発現が認められた。グラニセトロン投与プロトコルは、GEM療法、Tri-weekly Doc療法でTri-weekly Doc療法はFEC followed by DocでありFEC療法時はパロノセトロンが投与され、便秘の発現は10名中、5名(50%)であったがTri-weekly Doc療法開始後は、8名(80%)に認められた。DP療法は、グラニセトロンを使用しないプロトコルにも関わらず便秘の発現は4名すべて(100%)であった。添付文書では発現割合が低くても臨床場においては変化することがある。併用薬など予測因子を考慮し、抗がん治療開始前には患者説明において適切なアドバイスをすると共に副作用に対する予防策の検討をすることが重要であると考えられる。